

毛沢東「新民主主義論」は どのように成立したのか？

——中共の「五四」記念言説と国共関係を手がかりに

江 田 憲 治

はじめに	129
I 1938年の「五四」記念言説	134
II 1939年の「五四」記念言説	136
III 「新民主主義論」の成立要因	140
おわりに——「新民主主義論」の聖典化	146

はじめに

「毛沢東思想」とは、どのような「思想」であろうか？ もちろん、それは中国共産党の規約にあって「マルクス・レーニン主義」や「鄧小平理論」、「三つの代表」の重要思想、「科学的発展観」、「習近平の新時代の中国の特色ある社会主義思想」などと並び、今日でも党の「行動指針」とされている。具体的には、人民共和国成立以前における「ゲリラ」戦術・「農村による都市の包囲」戦略・「持久戦論」といった軍事に関わる言説、『実践論』『矛盾論』の哲学著作、延安「文芸講話」や「連合政府論」のような政策論が、また共和国成立後では「大躍進政策」や文化大革命をもたらした社会主義政権下における「継続革命論」が想起されるであろう。だが、こうした数多くの内容からしても、従来の研究の中で（近年にあっても）、最も重視されてきたものの一つに毛沢東の「新民主主義論」を数えることに、大きな問題はなさそうである。

なによりもこの「新民主主義論」は、中共指導者・毛沢東の長年に渡る思想的営為（また中国共産党内の理論的営為）の結果とされ、1949年における「中国革命」の成功、あるいは「中華人民共和国」の建国に大きな貢献をなした、と考えられてきたからである。実際、共和国樹立を決定した中国人民政治協商会議の「共同綱領」第1条は、「中華人民共和国は新民主主義すなわち人民民主主義の国家である」と規定しているし、ある「毛沢東思

想」の名を掲げる辞典は、項目の最初に「新民主主義」を挙げている。また、5冊からなるシリーズ本『毛沢東思想大系』の「総論巻」が、「毛沢東思想の主要な内容」として第1に挙げるのが「新民主主義論」である⁽¹⁾。また歴史学においても、「新民主主義革命」の時期を研究対象として画する研究動向は有力なものであった。1978年に社会科学院院長胡喬木の提案で企画・編纂が始まった「中国新民主主義革命史（多巻本）」は、李新・陳鉄健の主編でその第1巻『偉大なる開端 1919-1923』が1983年3月に刊行された。これはその後、上海人民出版社から「中国新民主主義革命史長編」として出版され（1991-97年、全12冊）、同シリーズはさらに2001年、「中国新民主革命通史」と名を改めて同じく上海人民出版社から刊行されている。また官製党史というべき『中国共産党歴史』（1991年）もほぼ「新民主主義論」の見解を踏襲しており⁽²⁾、このことは同書の2002年版、2012年版も同様である。

では、この「新民主主義」を毛沢東が最初に語ったのは、いつなのであろうか？ それはよく知られているように、抗日戦争期の『中国革命と中国共産党』（1939年12月15日）においてである。毛沢東はこの著作の中で、「現段階」の中国革命の性質を「明らかに」ブルジョワ民主主義革命だと断言しながら、次のように続ける。「だが、現在の中国のブルジョワ民主主義革命は、もはや旧式の一般的な民主主義革命ではなく——この手の革命はすでに時代遅れだ——、新式の特種ブルジョワ民主主義革命である。この革命は今まさに中国とあらゆる植民地・半植民地国家で発展している。この革命を、われわれは新民主主義の革命と呼んでいる」⁽³⁾。

ならば、この「新民主主義の革命」はどのような歴史的な位置を有するのか？ 毛沢東は次のように断言する。——新民主主義革命は「世界プロレタリア社会主義革命の一部」であり、「帝国主義＝国際資本主義に断固反対する革命」であって、「植民地・半植民地・半封建社会」終結と「社会主義社会」樹立の間に位置する過渡期の革命過程である。「この過程は、中国では1919年の五四運動で始まった。いわゆる新民主主義革命とはプロレタリア階級の指導下の、人民大衆の、反帝反封建革命」であり、欧米のようなブルジョワ独裁を造り上げるのではなく、「革命的諸階級の統一戦線の独裁」を作り上げる、と。またここで毛沢東は新民主主義革命と孫文晩年の思想との同質性を主張した。新民主主義革命は、「孫文が1924年に宣言した三民主義革命」、すなわち「連ソ・連共と農労〔農工〕政策の三民主義」と基本的に一致するのだ⁽⁴⁾。

そうであるとすれば、新民主主義革命は何を目標とし、どのような国家を作りあげるのであるのか？ その解答にあたるのは、中国の現段階の革命が作り上げようとしているのは「労働者・農民・知識分子・小ブルとその他のあらゆる反帝反封建分子からなる革命連盟の民主

共和国であり、その徹底した完成はプロレタリアの政策指導〔無産階級的政策領導〕の下にあってこそ可能となる」、この革命の勝利ののちには、資本主義の発展の障害物が除去されるから、「資本主義経済は中国社会にあって相当程度に大きく発展することが想像できる」との主張である⁽⁵⁾。

ここで毛沢東の主要な論点を抽出すれば、以下のようになる。

(a) 現在の段階での中国革命は、ブルジョワ民主主義革命であるが世界プロレタリア革命の一部であるところの新民主主義革命である。この革命は、(b) 中国では1919年の五四運動に始まった、(c) プロレタリア指導下の人民大衆による反帝反封建革命であり、(d) 孫文の三大政策の三民主義革命と基本的に合致する性質のものであって、その勝利後には (e) 革命的諸階級の連合独裁が誕生し、(f) 資本主義の障害物が除去され、資本主義が相当程度に発達する。

だが、毛沢東はここで議論を止めなかった。彼は翌1940年1月9日、陝甘寧辺区文化協会第1回代表大会で「新民主主義の政治と新民主主義の文化〔新民主主義的政治与新民主主義的文化〕」と題する講演を行い、これは2月15日刊行の『中国文化』創刊号に掲載され、2月20日付の中共機関誌『解放』第98・99期合併号に「新民主主義論」と改題のうえ発表された⁽⁶⁾。この毛沢東の新たな論考（以下、「新民主主義論」と統一して表記）は、『中国革命と中国共産党』に比べて数倍に達する分量となっているから、当然のことながら論点が増やされ、補足的議論も展開されている。

たとえば、「新民主主義論」第5節の「新民主主義の政治」では、「あらゆる革命的階級の反革命漢奸に対する独裁」を「国体」とし、民主集中制を「政体」とすることが新たに説かれている⁽⁷⁾。後者の「政体」についての記述を敷衍して述べれば、完全に平等な普通選挙で郷民大会を選出し、この郷民大会が区民大会を、区民大会が県民大会を、県民大会が省民大会を選出し、最終的に省民大会によって国民大会が選出され、国民大会が政府を選出する、これが民主集中制である、ということなのだが、これはもちろん、ソ連のソヴェエト制度——選挙を段階的に繰り返すことで、多数派が上位の選挙に向かうほど有力になる、したがって、実は決して「民主的」ではない制度——の導入提起にほかならない。

また、『中国革命と中国共産党』で毛沢東は、新民主主義革命は五四運動に始まるとしながら、同時に、新民主主義革命の特徴の一つとして、それが「プロレタリアの指導下にある」ことを挙げていた⁽⁸⁾。ならば、五四運動はプロレタリアの指導下にあったことになるが、1919年当時、中国共産党はまだ成立していなかった。この「矛盾」を回避し、自論

を通すために、「新民主主義論」で毛沢東は、「五四運動時期にはまだ中国共産党はなかったが、ロシア革命に賛同する初歩的な共産主義思想を有する知識分子はすでにたくさんいた〔已經有了大批的賛成俄国革命的具有初歩共産主義思想的知識分子〕」と述べたのである⁽⁹⁾。

さらに『中国革命と中国共産党』は「孫文が1924年に宣言した三民主義革命」＝「連ソ・連共と農工政策の三民主義」が新民主主義と「基本的に一致する」と説いていたが、「新民主主義論」はこの主張を一步進め、孫文の「連ソ・連共と農工政策の三民主義」のことを、「新三民主義」「真三民主義」と言いなして高く評価して見せた⁽¹⁰⁾。また、「新民主主義の経済」について述べる第6節は、「大銀行、大工業、大商業」を新たな共和国の「国家所有」にするとし、その根拠として国民党第1回全国大会の決議を挙げ、孫文の「資本節制」「平均地権」の主張を引用している⁽¹¹⁾。

ただし、『中国革命と中国共産党』が言及しながら、「新民主主義論」が言及を避けている論点もある。中国革命の勝利後、資本主義発展の障害物が除去されるから、「資本主義経済は中国社会にあつて相当に大きな発展をとげることになる〔資本主義経済在中国社会中有有一个相当大的發展〕」との前者の主張は、後者ではまったく触れられていない。逆に、『中国革命と中国共産党』では言及されていない「新民主主義の文化」は、「新民主主義論」全15節にあつて3分の1に当たる5つの節（第11～15節）で、つまり誰の目にも明らか大きな比重を以て論じられている。毛沢東は「新民主主義論」第11節「新民主主義の文化」で、旧民主主義と新民主主義が分けられるのは、政治的にだけでなく、文化的にもそうなのだと言き⁽¹²⁾、第12節「中国文化革命の歴史的特徴」では、「五四以前」はブルジョワの新文化と封建階級の旧文化の闘争が行われていたが、「五四以後」には「中国共産主義者〔共産党人〕が指導する共産主義的文化思想」が生まれた。この「新鋭軍」は哲学、経済学、政治学、軍事学、歴史学、文学、芸術など「社会科学」のあらゆる領域で「きわめて大きな革命を行っている〔無不起了極大的革命〕」と、過大なまでの評価を行っているのである⁽¹³⁾。

そして第13節「四つの時期」では、毛沢東は「文化革命」は政治におけるそれと同様に「統一戦線」であると説き起こし、「文化革命の統一戦線」の20年間を、1919～21年、1921～27年、1927～36年、1937～現在、の四つの時期に区分しているのだが、なかでも注目すべきは、毛が旧民主主義革命と新民主主義革命の画期に位置させた1919～21年の時期であろう。なぜなら、ここで毛は前述のように、五四運動時期には「初歩的な共産主義思想を有する知識分子」が数多くいたと述べることで、「五四運動は当時のプロレタリア世界革命の一部であつた」とする議論の強行を図っているからである。また同時に毛沢東は、「この文化運動は、当時〔1919～21年〕まだ労働者大衆の中にまで普及していなかつた」、

運動は「平民文学」のスローガンを提起したが、当時の「平民」は「いわゆる市民階級の知識分子に限られていた」とも指摘している⁽¹⁴⁾のだが、そもそも「平民文学」をか陳独秀が提起したのは1917年のこと⁽¹⁵⁾なのだから(もっとも毛は陳の名を挙げていない)、1919年を画期とする自身の議論と矛盾を来している。つまり、政治運動としても文化運動としても、1919年の「五四」運動を画期とすることには、明らかな無理があるのだが、この「無理」を毛沢東は無視している。

では、こうした無理はどのように生じたのであろうか？ 言い換えれば、「新民主主義論」は、五四運動・新文化運動への評価とどう連動して1939年から40年にかけて成立したのであろうか。この問題について、従来の研究史では必ずしもふさわしい関心が払われてきたとは言えない。

振り返って見れば、かつて日本の研究者の間では、毛沢東の「新民主主義論」を肯定的に見るか否定的に見るかの見解分岐を背景として、五四運動は反帝国主義運動なのか、それとも反日運動にすぎなかったのか、プロレタリアが運動で重要な役割を果たしたのか、それともそれはブルジョワ民族主義の運動であったのか、などをめぐって明確に主張を対立させた著作が刊行され、1987年には大規模なシンポジウムが開催された⁽¹⁶⁾。一方中国では、早くから五四運動が新民主主義革命を開始させたという毛沢東の論点に疑問が提起され⁽¹⁷⁾、1989年以後は、五四運動よりも後の政治事象を新民主主義革命の開始と指摘する論文が盛んに発表され⁽¹⁸⁾、「新民主主義論」の思想的淵源をめぐる論争も展開されている⁽¹⁹⁾。「新民主主義論」を理論史研究の立場からさまざまに高く評価する研究動向も、90年代以降盛んになる⁽²⁰⁾。

しかし、新民主主義革命の「起点」研究も、「淵源」研究も、そしてまた理論史家たちの研究も、それらは毛沢東の「新民主主義論」がなぜ、1939年から40年にかけての時点で、どのように成立したのかについて、全く関心を寄せてはいない。「起点」の新たな提起はそもそも「新民主主義論」の成立とは関係がないし、「淵源」論は広く時間軸を取った上での想定議論にとどまり、具体的な成立過程の検討には踏み込んでいない。恐らく、「新民主主義論」が公表と同時に共産党内で比類なき権威を持ったがゆえに、研究者にとって具体的な成立の経緯は研究対象とすべくもなかったのであろう。

しかしながら、一つの革命を成功に導くだけの議論を毛沢東が組み立てたことは確かである。この議論の成立過程や背景・要因を検討することなく——これを歴史状況の産物と見ることなく、「起点」論を提起し「淵源」論をことあげするのは、「新民主主義論」の歴史的な評価・位置づけに不十分である。

こうした立場から、本稿では、毛沢東の「新民主主義革命」の議論が1939～40年にど

のように生まれたのか、という問題の解明を課題とする。五四運動と運動時期の「初歩的共産主義者」に対する毛沢東の言説が間違っていたとしても——60年代初めに朱務善が指摘し、80年代末に張静如・姜秀花が論証したように——なぜ毛沢東は「五四」にこだわったのだろうか？ そもそも「五四」は抗日戦争期の中国共産党からどのように評価され、語られてきたのか？ これらの点を踏まえ、「五四」が毛沢東の「新民主主義論」とどのような関係性を持つのかは、あらためて問われるべきではないだろうか？ そしてまた「五四」と切り離せないはずの「新文化運動」は、どう評価されていたのか？

以下、これらの問題意識をもとに、1938年5月4日における中共の「五四記念」言説を検討することから作業を始めたい。

I 1938年の「五四」記念言説

1938年5月4日、中国共産党中央は、中国国民党統治地区における機関紙『新華日報』の第1面に社説「五四を記念する〔紀念五四〕」を掲げ、以後ほぼ毎年わたって続くことになる「五四」記念キャンペーンを開始した。社説が言う「五四」とは、「中華の人民がはじめて、新たな大衆闘争の方式——授業ボイコット・ストライキ・商店営業停止・街頭演説・デモンストレーション・日本製品ボイコット〔罷課、罷工、罷市、街頭演説、遊行示威、抵制日貨〕——を採用した」とあるから、1919年5月4日の北京学生運動に始まる大衆的政治運動の高揚にほかならない。『新華日報』の社説は、これを「中華民族の自らの力による解放闘争の最初の巨大な波」であるとし、「五四運動の歴史的意義は、なによりもまず、近20年来の中国民族解放運動の偉大な開端たることにある」と評したのだった。

それは、国民党と共産党がともに「記念」でき、しかも抗日の課題に直結する歴史的事件の「記憶」を喚起することによって、第二次国共合作を強固にし、抗日戦に向けてより幅広い階層と社会集団の動員を図るための試みであったと考えられる。

ところが管見のかぎり、抗日戦争期の「五四記念」に関する中国の研究論文は、すべて、この時期の中共の「五四記念」を、1939年以後のものとして語っている⁽²¹⁾。なるほど、1939年3月18日、中共指導下の西北青年救国連合会常務委員会は、5月1日から同7日までを同会2周年記念と青年の参戦動員週間とすること、5月4日を「中国青年節」とすることを全国の青年に向け提案することを決定、中共中央青年工作委員会も4月5日と6日に青年節記念通達を北方局・南方局・中原局・東南局および各部隊に発していた。そして、国民党の三民主義青年団（団長・蒋介石）も、5月4日を「中国青年節」とすることを決めたのである⁽²²⁾。しかし、「五四記念」に関するこれらの研究論文は、「記念」の経緯や方式について

語っても、中国共産党が当時「五四」をどのように論じていたのか、については全く興味を示してはいない。「中国青年節」に注目するあまり、中共の「五四記念」が前年に始まっていることも、その時中共の理論家たちが「五四」をどう論じていたのかについても、注意を払っていない。

しかしながら、1938年の「五四記念」は、39年のそれや40年の毛沢東の議論の特徴を明らかにする上でも、興味を引くものである。たとえば、五四を評価して見せた『新華日報』の第1面の社説「五四を記念する」は、前述のように政治面についてだけ語り、毛沢東の「新民主主義論」のような「新文化」を視野に収めたものではなかった。たしかに、『新華日報』38年5月4日第4面の黄琪翔（国民政府軍事委員会政治部副部長）『『五四』の精神を發揚して青年の団結を強化しよう』は、青年層が参加する「文化運動」は「政治運動」と同じく「五四時代」に始まった述べ⁽²³⁾、第3面の潘梓年（新華日報社長）の『『五四』の光榮ある伝統を継承しよう』も、「五四運動」の名で、政治運動以外の文化運動にも言及している⁽²⁴⁾。ただし黄琪翔の文化運動への言及は、前記引用のわずか1箇所にとどまり、潘の場合は文化運動の一面をかなり批判的に見ている。——五四運動における「科学研究の推奨と科学的方法の紹介〔科学研究的推重と科学方法的介紹〕」は「批判的に継承すべきである〔批評地加以發揚的〕」。なぜなら、「当時提唱されたサイエンスは、いくらかの他人の科学研究の成果を丸呑みにしただけで、どのようにすれば外来の科学の種子が中国の国土に播種され、芽と葉を出し、花を咲かせ実を結ぶことができるか、まったく注意を払わなかった」からである⁽²⁵⁾。さらに次のようにも潘は述べる。

継承と同時に批判せねばならないのは、当時の孔教反対、旧倫理反対の狂潮である。……当時の打倒孔家店は、手当たり次第に過ぎ、わが国の数千年来の固有の文化を一筆で抹殺し、孔教の中でもいくらかのよいもので吸収するに値するものまでも『玉石俱に焚いた』。これは、ひどく非科学的であることを免れない⁽²⁶⁾。

数日遅れて陝甘寧辺区の機関紙『新中華報』に發表された中共理論家艾思奇の「五四文化運動の任務を完成させよう」(1938年5月10日)も、潘梓年と同様に「五四文化運動」に対する点数は辛い。艾は、「五四文化運動は中国民族文化の否定の時代であった」と述べる⁽²⁷⁾。

彼は、「中国の民衆が大衆的な政治活動、大衆的救国運動をもつようになったのは、すべて五四運動以後にはじまる。このことは、五四文化の民主思想の影響もその原因の一つであると言わざるを得ない」としながらも、次のように議論を展開する。

五四文化の任務は決して完成されていないし、民主と科学の精神は、中国民族の中で普遍的に発揚されてはいない。ばらばらになった文化伝統〔残缺不全的文化伝統〕として、今日に至っている。それはなぜか？ 第一に封建勢力が頑強に存在するからであり、……五四がなお民族文化の否定の時代であったことにより、民族自体の基礎の上に民主と科学の精神を発揚することができていないからである。新文化の基礎は強固ではない⁽²⁸⁾。

したがって1938年の「五四記念」について指摘できるのは、大衆的政治運動として五四運動は高く評価されている⁽²⁹⁾ものの、それを準備したものとしての、今日いうところの「新文化運動」(ここでは「五四文化運動」)は批判の対象として、あるいはひどく限界を有するものと評価されていることである。また陳独秀による「文学革命」についての言及もない。こうした議論は、前年6月発表の艾と同じく中共理論家であった陳伯達の言説に比べて見ると、その評価の低さ(あるいは限定的評価)が一層際立つように思われる。陳伯達が上海で発表した長文の論文「五四新文化運動を論ず」⁽³⁰⁾は、明確に「五四新文化運動」の語を提起し、これを1915年の『新青年』創刊に始まり、1923年の「人生観の論戦」で終わると定義している。しかも、陳伯達は、五四啓蒙運動が「公然と数千年来神聖不可侵であった孔教に自覚的に挑戦〔公開地向数千年来神聖不可侵的孔教、進行自覚的挑戦〕」したことを評価し、「五四の反儒教運動は、やり方が過激にすぎたのではなく、むしろ充分に広範でも深刻でもなかった〔五四的反儒教運動不是做得太過火、而是還做得不够広汎、還不够深刻〕」ことに問題がある、とまで述べているのであるから、潘梓年とは全く逆の議論を展開していたと言わねばならない。

なお、1938年の「五四」記念の直前、康生らは中共の機関誌『解放』で陳独秀は「日本のスパイ」とする非難キャンペーンを開始していた。このことも、38年の五四記念の新文化運動に関わる言説を規制した可能性がある⁽³¹⁾。新文化運動を語れば、どうしても陳独秀が想起されるであろうからである⁽³²⁾。

II 1939年の「五四」記念言説

〈重 慶〉

ところが翌1939年、「五四」評価(とくに文化運動に向けたそれ)は、一変する。

前述のように、延安西北青年救国連合会の提案と三民主義青年団の決定を受け、5月4日は「中国青年節」となったのだが、このことを受け発表された『新華日報』5月4日の社説

「『五四』運動の精神を發揚しよう〔發揚「五四」運動的精神〕」は、前年の論調とは大きく異なる議論を展開する。

すなわち同社説は、冒頭で「『五四』運動」とは、「わが国の民族解放運動闘争史における栄光ある一頁」であり、わが国の近代青年運動と新文化運動の発動」である、とする。それは、政治的には「民主政治を勝ち取ろうとした思想の運動」であり、思想面では「旧礼教と玄学に反対し科学思想を推奨した闘争」、文学面では「『文学革命』のスローガンを提起し、今日の中国の新文学運動のために発展の道を開いた。したがって、『五四』運動は、わが国の民族解放闘争の歴史上偉大な意義を持つばかりか、中国の新文化運動と思想啓蒙運動の歴史における一個の大きな転換点である」⁽³³⁾とするのである。

つまり1939年の『新華日報』社説は、五四運動を「民族解放闘争」のみならず、「新文化運動」（と「思想啓蒙運動」）を含むものとして扱い、その「全体」での歴史的な「一大転換点」を主張したのだった。ただし、転換「点」と言っても、ここでの五四運動は、「文学革命」を提起したとされる以上1917年からのものになるし、「玄学に反対した」とは「科学と人生観論争」のことであろうから1923年までを含むことになる。実に、7年間にわたる転換「点」である。しかもこの社説の冒頭で、「この栄光ある記念日からちょうど20週年になる」として、五四運動が1919年に始まることを明示しながら、である。言い換えれば、転換点としては1919年が、運動内容としては17年から23年の6年間を記念の対象とする奇妙な方法で、歴史的意義の拡大が図られたことになる。

〈延安〉

一方、数日前の延安では、『新中華報』に艾思奇「五四文化運動の今日における意義」⁽³⁴⁾が発表されていた。『新華日報』の社説が1938年と1939年とで「五四」評価が異なるのと同様に（あるいはそれ以上に）、艾思奇は、38年時点での自身の見解を大きく変更している。38年に「五四は民族文化の否定の時代である」と述べていた彼は、この39年論文の冒頭で、次のように述べる。

五四文化運動は中国民族精神の空前の覚醒運動であり、この運動は、中国の民族民主革命闘争の歴史的産物である。それが空前であるのは、この運動以前、中国の革命運動にはこのように大胆な思想運動を産み出し、自らの民族内部の腐った遺物の徹底的な除去を図り、努めて斬新な精神を打ち出して自らの民族精神の革命的力量を動員することができていなかったからである⁽³⁵⁾。

彼は、「五四文化運動はどのようなことをしたのか？」と提起したのち、これに対する解答として二つのことを答える。

第一に、五四文化運動は、無情なまでに中国民族文化における一切の腐った代物に反対したが、中国文化を絶対的に否定した訳ではなかった。……第二に、五四文化運動は各種各様の西洋の学術思想を紹介したが、しかし新文化運動の内容は外来文化の輸入だけという訳ではなかった。……五四文化運動の中の各種学術思想の紹介の、その意義は中国自身の新文化という植物のために適切な肥料を探し求めた過程にある⁽³⁶⁾。

前年には「民族文化の否定の時代」と述べられていた「五四」は、今回、「中国文化を絶対否定した訳ではない」とされる。そして、艾思奇が述べるのは、以下のような面からの高い評価である。

五四文化運動が育てた最も大きな二株の文化的樹木が、中国のマルクス主義と発展を遂げた三民主義〔傍点引用者、以下同じ〕である。……五四文化運動から、中国には真に自覚した民衆運動が生まれ始め、とりわけプロレタリア階級がこの運動の中で舞台に姿を現した。このことは孫文先生の三民主義がさらに発展の歩みを進める基礎を与えた。孫文先生はまもなくこの基礎に気づいた。かくして三民主義に〔連ソ・連共・農工政策の〕三大政策が加えられたのである⁽³⁷⁾。

実際には、孫文は「三大政策」を提起していないこと、この言葉を発明したのは、中共党員であることは、すでに明らかになっている。中共の文献では、1925年10月の時点で国民党左派の政治主張の中に「革命のために労働者・農民を支持する〔為革命而賛助工農〕」「ソ連と共産党と連盟する〔聯絡蘇俄与共産党〕」が含まれることがすでに指摘されているし、26年1月1日の省港罷工デモのスローガンには、「総理の労農政策を支持しよう〔擁護総理工農政策〕！」「総理の連ソ政策を支持しよう〔擁護総理連俄政策〕！」「総理の共産党との合作政策を支持しよう〔擁護総理与共産党合作政策〕！」があった⁽³⁸⁾。そして同年10月、これらを「総理」の「連ソ・連共・農労〔農工〕の三大政策」とまとめて宣伝しはじめたのが、黄埔軍官学校の共産党員たちである⁽³⁹⁾。以後この「三大政策」の用法は、1926年11月4日付の陳独秀「国民党問題についての報告」や1936年8月の中国共産党の国民党宛書簡にも登場する⁽⁴⁰⁾。

しかし、いかに「三大」であっても、それは「政策」であって「主義」ではない。「三大

政策」を「発展を遂げた三民主義」と表現して「主義」の次元にまで高めたのは、艾思奇の功績のようである。毛沢東が、こうした彼の表記を一步進めて、40年1月の「新民主主義の政治と新民主主義の文化」でこれを「新三民主義」と呼んだのであろうことは、推測に難くない。

ただし同時に興味深いことに、1939年の5月の時点で、艾思奇のこうした五四運動と「五四文化運動」に対する高評価を、毛沢東は共有してはいない。同年5月、毛沢東は五四運動について二つの文章を発表しているのだが、その一つは、中共の中央機関誌『解放』第70期（1939年5月1日）の巻頭に掲載された「五四運動」と題する以下のような短文である（『解放』の誌面でちょうど1頁）。

20年前の五四運動は、中国の反帝反封建のブルジョワ民主主義革命が新たな段階に発展をとげたことを示している。五四運動は文化革新運動としては、中国の反帝反封建革命のブルジョワ民主主義革命のある種の表現形式であるにすぎない。当該時期の新たな社会勢力の成長と発展によって、中国の反帝反封建のブルジョワ民主主義革命には一個の新鋭部隊〔生力軍〕が加わった。それは、中国の労働者階級であり、学生大衆であり、新興ブルジョワ階級である。そして五四の時、運動の先頭に勇敢な姿を現したのは数十万人の学生であった。これは五四運動が辛亥革命よりも一步進んだところである⁽⁴¹⁾。

ここで毛沢東は、運動の「新鋭部隊」の一つとして労働者階級を挙げているが、同時に新興ブルジョワ階級と学生大衆もそこに数え、「先頭」に立ったのは学生だとしている。「プロレタリアの指導」は問題にされてもいない。彼の強調点は——『中国革命と中国共産党』（1939年12月）や「新民主主義論」（1940年1月）が言う世界プロレタリア社会主義革命の一部であることではなく——五四運動は「ブルジョワ民主主義革命の新たな段階」だということである。彼はこの時（も）、中国共産党第6回党大会（またコミンテルン）に由来する見解を維持して、中国革命の当面する革命の性質を「ブルジョワ民主主義革命」と表明していた。この短文の後半部分では、毛沢東は次のように述べている。「もし一人の共産主義者が、なぜまずブルジョワ民主主義制度のために闘争し、その後で改めて社会主義の社会制度を実現せねばならないのか、と質問するとすれば、答えは以下の通りである。歴史の必然の道を歩むのだ、と。」⁽⁴²⁾ しかも、毛沢東は、「知識分子は労働大衆と結びつくことができなければ、一事を成し遂げることはできない。辛亥革命と五四運動の失敗は、この原因からである」と述べている⁽⁴³⁾。この時の毛沢東は、五四運動を辛亥革命と同じく、「失

敗」したものと捉えているのである。

また彼は、艾思奇が「五四文化運動」として高く評価したものを、「文化革新運動」と呼び直してはいるものの、「中国の反帝反封建のブルジョワ民主主義革命の一表現形式にすぎない」としており、「新民主主義論」に見られるような、五四以後の「共産主義的文化思想」への言及はない。

さらに、同年5月4日、毛沢東は延安で開催された「五四運動二十周年記念大会」で講演を行っている。毛はこの講演で、五四運動を軍閥の「売国政府」に反対したものだとして述べ、『解放』の短文と同様に「反帝反封建的民主革命」と評価しているが、一方で毛沢東は、五四運動は「やはり失敗した」ものと述べている。運動の後でも「中国は依然として帝国主義と封建勢力の統治下にあった」からである⁽⁴⁴⁾。実際、毛沢東のこの講演での強調点は、青年たちを抗日戦での「一個の方面軍」と呼び、「主力軍」たる労農大衆と合流するよう呼びかけたことに現れているように、抗日戦勝利に向けて彼らを動員することにあった⁽⁴⁵⁾。なお、毛がこの講演で、「人民民主主義」の語を用いたことに注目し、これを「新民主主義」の先駆けのように考える中国研究者もいるが、毛自身は「人民民主主義の共和国イコール三民主義の共和国」と述べており、蒋介石の「国家至上、民族至上」「軍事第一、勝利第一」といった語が肯定的に引用されている。こうした点では、前年の「新段階を論ず」の所論（後述）と大差はない。また彼は五四運動が何らかの歴史的画期性を有するものとも述べていない。

Ⅲ 「新民主主義論」の成立要因

とすれば、1939年における中共の「五四」記念言説は、39年5月以後の時点で、毛沢東の「新民主主義論」成立に影響を与えた（貢献した）、と見ることは可能であるかもしれない。

すなわち、(1) 幅広く「五四」運動の画期性を認め（民族解放闘争・新文化運動・思想啓蒙運動の「一大転換点」であったのだとする『新華日報』社説）、(2) 毛が「新民主主義論」で提起した「新三民主義」につながる「発展をとげた三民主義」を提起し（艾思奇論文）、(3) 「新文化運動」の重要性を説いた、という3点については、中共の五四言説の、毛沢東の「新民主主義論」に対する影響として指摘できるからである。

実際、「新民主主義論」（1940年1月）の冒頭で毛沢東は、「中華民族の新社会と新国家」の建設と、その中での「新政治、新経済」と「新文化」の形成を説き⁽⁴⁶⁾、しかも前述のように「『五四』以後の中国の新文化」（「文化革命」とも呼ばれている）にかなりの紙幅を割

いているのだが、39年5月の短文と講演では、毛沢東は「新文化」という用語を一度も使っていないし、文化運動について触れてもいない。

また、1939年5月に五四運動は「敗北した」と見ていた毛沢東が、この時点で五四に時代の画期性を見ていたかどうかは疑問である。「敗北した」と評価する運動によって、新たな時代が切り拓かれたとは、誰も考えないのではないだろうか。したがって、「新民主主義論」が「旧民主主義革命」時代と「新民主主義革命」時代の画期として1919年の「五四」を位置づけたのは、毛沢東ほんらいの発想ではなく、中共の理論家たちの「五四記念」言説の影響を受けた、あるいは1939年5月の『新華日報』社説の「一大転換点」の表現を進めた、と見ることができるだろう。

もちろん、中共の理論家たちの影響だけを過大に評価する訳にはいかない。「新民主主義論」（と『中国革命と中国共産党』）が述べる「新民主主義の革命は世界プロレタリア革命の一部である」とした上で「それは中国では1919年の五四運動に始まった」⁽⁴⁷⁾と説く論点は、『新華日報』社説や艾思奇らの論説の影響だけでは説明しきれないからである。この論点の理論的根拠は——中国の研究では意図的に思えるほど言及が少ないのであるが——そもそも毛沢東自身によって明らかにされている。

「新民主主義論」の冒頭近くで毛沢東は、「中国革命の歴史的特徴は民主主義と社会主義の二つのステップに分かれている。その第一ステップは、現在もはや一般の民主主義ではなく、中国式の・特殊な・新式の民主主義であり、新民主主義である」⁽⁴⁸⁾と規定し、こうした歴史的特徴〔歴史特点〕は、「第一次帝国主義大戦とロシア十月革命のち」生まれたものであり⁽⁴⁹⁾、「これ以後、中国のブルジョワ民主主義革命は、新たなブルジョワ民主主義革命の範疇に属することになった。革命の戦線而言えば、世界プロレタリア社会主義革命に属する一部となったのである」⁽⁵⁰⁾、と述べる。このテーゼを打ち出す際に、毛沢東が理論的な根拠としたのが、スターリンの「十月変革と民族問題」（1918年）と「ふたたび民族問題によせて（セミツチの論文について）」（1925年）である。スターリンが1918年に書いた論文の、「〔十月の変革は〕社会主義的西欧と奴隸的東洋とのあいだに橋をかけ、世界帝国主義にたいする西欧のプロレタリア階級からロシア革命をへて、東洋の被圧迫諸民族にいたる新しい革命戦線をうちたてた」⁽⁵¹⁾という部分と、25年言説の「一方では戦争が、他方ではロシアの十月革命が、民族問題を、ブルジョワ民主主義革命の一部分から、プロレタリア社会主義革命の一部分に転化させた」⁽⁵²⁾という記述を中心に、毛沢東はスターリンの議論をかなり丁寧に引用している。

そしてこのスターリンが第一次世界大戦とロシア十月革命を民族問題のプロレタリア社会主義革命への転化の契機としていることに倣って、毛沢東は中国における契機として

1919年の五四運動を選んだ。前述のように、中共理論家たちが盛んに「五四」評価を（全面的に）高める記念言説をキャンペーンしていた以上、それ以外の選択肢はなかったであろうが、それにしてもスターリン（やレーニン）が、ヨーロッパ大戦と十月革命といったように、数年の時間幅をもって論じていた革命の画期を、毛は機械的に〈1919年の五四運動〉に措定した。だから、『中国革命と中国共産党』で毛沢東は、新民主主義革命は五四運動に始まり、「プロレタリアの指導下」にあったとし⁽⁵³⁾、「新民主主義論」で「初歩的な共産主義思想を有する知識分子」を持ち出したのだった⁽⁵⁴⁾。

そして、毛沢東がこのスターリン言説を引用することができたのは、生活書店の編集長を勤めたこともある翻訳家張仲実の訳で、スターリン『民族問題を論ず』（1938年12月序、生活書店）が1939年4月⁽⁵⁵⁾に、出版されていたからである。

こうした事実を多くの中国の「新民主主義論」研究者はあまり重視してはいない。従来の研究でスターリン理論の毛沢東の新民主主義論に対する影響について明言しているのは、管見のかぎり、楊奎松「毛沢東はなぜ新民主主義を放棄したのか——ロシア・モデルの影響問題に関して」（1997年）⁽⁵⁶⁾、と王也揚「毛沢東の新民主主義論とその変化を歴史的に見る」（2001年）⁽⁵⁷⁾、および于光遠『“新民主主義社会論”の歴史的命運——読史筆記』（2005年）⁽⁵⁸⁾だけのようである。ただし、これらの論文・著作にあっても、スターリン言説は、スターリンが踏まえたレーニンの主張として重視されている。楊氏の言及では、レーニンとスターリンの名が併記され（スターリンはレーニンの1916年10月の論文「自決に関する討論の成果」を引いている⁽⁵⁹⁾）。また王論文も、「スターリンが述べたこの理論は、レーニン主義の基本理論である〔斯大林所闡発的這個理論正是列寧主義的基本理論〕」としている。また、于光遠の著作も、スターリンについては1行だけの指摘にとどまり、むしろ、レーニンの「民主主義革命における社会民主党の二つの戦術」（1905年）の役割が詳述されている⁽⁶⁰⁾。

しかし毛沢東のスターリンからの引用は、原載の『中国文化』誌面で24頁中1頁弱（17行）にすぎないが、実は「新民主主義論」の中で、他者の言説で2行以上の文章が引用されているのはスターリンのものだけなのである。毛沢東が、新たな論点を提起する際にスターリンの文章を引用することでその権威を利用したことは間違いない。事実、毛沢東側近の理論家陳伯達は、1949年の文章で「毛沢東同志はスターリンの学生であり戦友である」とし、次のように述べている。

毛沢東同志が幅広くスターリンの著作を読む機会を持てたのは、抗日戦争の時期である。毛沢東同志は最高の情熱を以て、入手したスターリンの著作を閲読し、深く

考察した。皆さんは知っていよう。毛沢東は、彼が書いた「新民主主義論」の中で、スターリンの著作が彼に与えた重要な啓発についてはっきり述べている。毛沢東同志は、中国革命は世界社会主義革命の一部であるという正しい命題を中国共産主義者が提起したのは、スターリンの理論にもとづいているとはっきり述べている。毛沢東同志は、スターリンの理論にもとづいてプロレタリアの指導権の思想を発揮し、彼のこの著名な戦闘的な著作の中で、中国でブルジョワ独裁を樹立しようとする反動的夢想に痛撃を与え、一方でプロレタリア階級をしてブルジョワ階級に追従させようとする党内の日和見主義に痛撃を与えた⁽⁶¹⁾。

このように見てくるならば、毛沢東の「新民主主義論」成立に影響を与えた思想として中共理論家たちの「五四」記念言説とともに、当時極めて高い理論的権威を有していたスターリン言説の影響は決して無視できない。そして理論家たちの「五四」記念言説とスターリンの著作を毛沢東が読むことができたのは、ほぼ1939年5月以降のことである。この5月時点で公表していた前述の『解放』掲載の短文と延安での大会演説とは全く異なる（あるいは全く新たな論点を加えた）『中国革命と中国共産党』（1939年12月）と「新民主主義論」（1940年1月）を毛沢東が公表することができたのは、この二つの材料あればこそ、のことである。

そしてもう一つ、「新民主主義論」成立に違った意味から影響を与えたのが、陳伯達の前記引用部分にも見える、国民党の側からする、中共党の最高指導者毛沢東に対する批判である。すなわち中共党内では、1938年に開催された開催された中央政治局会議（9月14～27日）の冒頭、モスクワから帰国した王稼祥が毛沢東による中共中央の指導権掌握を認めるコミンテルン書記長ディミトロフの指令を伝達した結果、毛沢東はモスクワ留学派（王明）との権力闘争に勝利し、以後、毛の文章が党機関誌に掲載される場合、必ず巻頭に掲載することが決定されるなど、理論的な権威も獲得するに至っていた⁽⁶²⁾。そしてつづいて開かれた中共の拡大六期六中全会で毛沢東は、中央政治局を代表して政治報告「抗日民族戦争と抗日民族統一戦線発展の新段階」を報告した（10月12～14日）。毛沢東のこの政治報告は「新段階を論ず」として、延安の雑誌『解放』第57期（1938年11月25日）の巻頭に掲載され、重慶では『新華日報』同年12月7日から10日にかけて連載されたのであった。彼は、抗日戦争が防御・対峙・反攻の三段階のうち対峙段階（新段階）に移行しようとしていること⁽⁶³⁾、中国のような半植民地大国には「強国で長期的で広大な戦争〔堅持的長期的広大的戦争〕」を組織する優良な条件が数多くあり、「都市を包囲し、都市を孤立させ」、世界情勢の変動を待つて敵（日本軍）を駆逐し都市を回復する戦略を述べた⁽⁶⁴⁾が、同時に彼

が強調しているのは「蔣委員長」と国民政府の擁護であり⁽⁶⁵⁾、「三民主義共和国」の樹立である⁽⁶⁶⁾（民主政治や民衆の生活改良の必要も説いてはいるのだが）。「共産党は決してその社会主義と共産主義の理想を放棄しないが、彼らはブルジョワ民主主義革命の段階を経由して社会主義と共産主義の段階に到達するのだ」⁽⁶⁷⁾、「現在の抗戦段階と戦後の民主共和国を徹底して完成させる段階は三民主義の段階であり、すべてブルジョワ民主主義革命の性質の段階である。……三民主義の信奉と実行に忠実でない者は、口先だけで表裏のある、不実なマルクス主義者だ」⁽⁶⁸⁾。

だから、毛沢東はこの時、「各党が共同して民族連盟を組織し、蔣介石先生を推戴してこの連盟の最高指導者とする〔各党共同組織民族連盟、擁戴蔣介石先生作這個連盟的最高領袖〕」とする「長期合作の組織形式」まで提案し⁽⁶⁹⁾、さらに次のようなことまで述べている。

われわれにとって、愛国主義は国際主義と密接に結びついており、われわれのスローガンは祖国を守り侵略者に反対して戦うことである。われわれにとって、敗北主義は罪悪であり、全力で蔣委員長と国民政府を援助することは天職であり、だれにもその責任を転嫁しない。ここには一点の消極性もない⁽⁷⁰⁾。

ところが、国民党系の論客たちはこれに鋭い批判の矢を向けた。国民党の『中央日報』は早くも1938年12月25日の紙面に張君勳の「毛沢東先生への公開書簡」⁽⁷¹⁾を掲載したが、これは冒頭で毛沢東の六中全会の報告書を読んだとした上で、「蔣先生の領導の下に別の一党があり、自ら党軍を有し、自ら〔特〕区を有し、自らマルクス主義を標榜するのでは」、毛沢東が提起した「長期合作方式の民族連盟」に実現の可能性はない、と論じるものであった。また翌年1月に重慶の雑誌『血路』に発表された張絢中「毛沢東先生の「新段階を論ず」を評す」⁽⁷²⁾も、以下のように論じた。「現在抗戦は第二期に入った。共産主義者〔共産党人〕の意見によれば、「中国が反攻を準備する」「新段階」になろうとしている、というのである。しかし、数々の困難がある。共産主義者はこの「困難」を利用して国民党に「進歩」を要求し、自らを「強固」にし、「発展」させ、将来再度の革命を起こそうとしているのだ」。

また葉青（任卓宣）も、「一つの党に一つの主義〔一個党一個主義〕」、つまり政党は国民党に、主義は三民主義に統一されるべきだ、との議論を「發明」（これは劉伯承の語）して共産党を攻撃し、毛沢東らの議論を「段階革命論」だとして批判している。彼によれば、政治革命と社会革命を一度に行うことで「一勞永逸」を目指した孫文の主張こそ「一回革

命」論であり、「孫先生〔の三民主義〕を信じこれを是とするのであれば…根本から一回革命に反対することはできないことなのだ〔如果相信而又是孫先生的、…你不能根本反对一次革命〕」、と論じた⁽⁷³⁾。

毛沢東が「新民主主義論」の第8節「〔左〕傾空談主義に反駁する」で「何人かの悪意のある宣伝家が、二つの異なる革命の段階〔新民主主義と社会主義革命〕を故意に混同し、いわゆる「一回革命論」を提唱し、それでもってあらゆる革命は三民主義に含まれるのだから共産主義は存在の理由を失うと証明しようとしている〔用以証明甚麼革命都包举在三民主義裏面、共産主義就失了存在的理由〕」と述べているのは、明らかに葉青の主張に向けた批判である。その批判に対し、わざわざ「左」傾の語を加えたのは、葉青が中共からトロツキストを経て反共理論家となっていたことを揶揄するためのものであろう。「新民主主義論」の第7節「ブルジョワ独裁に反駁する」が国民党の「一党専政」を非難し、第9節「頑固派に反駁する」が「一つの主義」を「反民権主義の作風」だと批判しているのも、葉青ら反共理論家の「新段階を論ず」に対する論難への反批判である。

一方、こうした論客たちの言論攻勢以外の国民党の動向を見ても、蒋介石が1938年12月に陳紹禹・周恩来らとの会見時に、「自分の責任は共産党を国民党に合併して一つの組織とすることである」と述べたように⁽⁷⁴⁾、共産党の提案する「長期合作」には警戒的であった。しかも、国民党は翌39年1月に開催された五期五中全会で「異党活動制限方法〔限制異党活動弁法〕」なる文書を作成し、秘密裏の執行を開始した。当初それは政治的な「限共」が主で軍事的措置は従であったとされるが、それでも各地で共産党の軍や組織に対する襲撃や逮捕・殺害（「摩擦」と呼ばれた）が起こった。共産党は7月に周恩来から軍事委員会政治部長陳誠に抗議の電報を送らせ⁽⁷⁵⁾、9月には毛沢東が国民党系新聞の記者を延安に招き、衝突事件での中共の立場はあくまで自衛だ、〔共産党支配地区である〕「辺区」はそもそも国民政府行政院が正式に認可したものであり「統一」を理由とする解消論は成り立たない、「長期合作には政治的保証が必要であり、分裂の可能性はそれでこそ排除される、これこそ徹底して抗戦を堅持し民主政治を実行することなのだ〔這就是堅持抗戰到底實與實行民主政治〕」と強調した⁽⁷⁶⁾。

しかし、1939年11月に国民党の六中全会が開かれた時、事態は一層悪化しているように中共には判断された。翌12月に作成された中共中央書記処の「時局に対する指示」によれば、この六中全会では軍事的「限共」と政治的「限共」のバランスが逆転していた。国民党は「共産党問題処置新方法〔処置共党問題的新方法〕」と「抗日詐称部隊一掃命令〔剿弁冒充抗日軍的命令〕」を通達し、中央軍が直接出動し、八路軍と新四軍への包囲・攻撃を準備していると考えられた。したがって「時局に対する指示」は、各地の軍と組織の任務の

第一に統一戦線工作の発展、中間階層の獲得を挙げてはいるのだが、以下のような軍事方針をも通達した。「あらゆる地方で局部的な突発的事態に備えること」「華北・西北・中原一帯で軍事進攻に直面した際、正当な理由があり有利な条件がある場合は、断固としてこれに反抗し、自己の頑強性を極限にまで発揮し、絶対に軽々に後退を口にしてはならない」。——国民党軍との本格的な戦闘が覚悟されていたのである。だから、中央書記処はこの「指示」の宛先を省委員会・師団司令部に限定し、読後の破棄を命じている⁽⁷⁷⁾。

繰り返すが、こうした政治的軍事的状況は、1939年11月から12月にかけて明確となった。このことは、毛沢東が1年前に、「蔣委員長擁護」や「三民主義共和国樹立」を前面に押し出し、国民党との融和（長期合作）を主張した「新段階を論ず」の構想が、もはや有効ではなくなったことを意味している。「新民主主義」を提起した『中国革命と中国共産党』（1939年12月）と講演原稿「新民主主義の政治と新民主主義の文化」（1940年1月）は、だからこそこの時点で生まれた、と考えることができる。

おわりに

——「新民主主義論」の聖典化

毛沢東の「新民主主義論」は、長きに渡って中国社会主義の「聖典」としての扱いを受けてきたと言えるだろう。

このように言うのは、冒頭でも触れたように同論がどのような歴史状況で、いかなる言説の影響を受けて成立したのか、検討されることはこれまでほとんどなかったように思われるからである。たとえば、ある毛沢東思想についての研究書は、「1935年1月中共中央政治局は遵義で拡大会議を開き、毛沢東の紅軍と党中央における指導的地位を確立した。陝西北部に到着後、とりわけ1938年に開かれた中共六期拡大六中全会後、中共中央には毛沢東を核心とする成熟した指導グループが形成され、個人の智慧と集団の智慧が有機的に結合を果たした。これは中国革命が勝利に向かう重要な保証であり、また毛沢東思想が成熟に達する重要な条件であった」と述べ、つづけて抗日戦争期の膨大とってよい毛沢東の著作・論文の名を挙げている⁽⁷⁸⁾。もちろん、その中に『中国革命と中国共産党』「新民主主義論」も含まれているのだが、説明はこうした大状況の提示にとどまり、毛沢東の著作の成立に影響を与えた内外の具体的要因については、踏み込まれていない。この点は代表的な新民主主義理論史研究の著作も、同様である⁽⁷⁹⁾。

こうした諸研究のあり方を踏まえ、最後にあらためて本稿の所論をまとめておきたい。

第一に、毛沢東が1938年に公表した「新段階を論ず」の枠組みが、1939年後半になって

もはや有効ではなくなったとき(あるいは破綻に瀕したとき)、新たな政策の構築が目指されねばならなかったということである。それはもちろん、「三民主義共和国」ではないものを求めて、である。だが、そもそも中共党が、社会主義政党である以上、新たな政策を支えるためには新たな革命理論の提起が必要だった。「理論なくして革命なし」(レーニン「なにをなすべきか」)なのであるから。そのことは、毛沢東の「理論家」としての立場を強化することにもつながった。

第二に、新たな革命論の役割は、来たるべき革命の性質をブルジョワ民主主義革命に位置づけながら、プロレタリア階級とこれを代表する政党(中国共産党)が指導権を握ることを理論的に正当化することであった。言い換えれば、国共合作には依存しない民主主義革命論である。この議論に格好の素材を提供したのが、スターリンの著作の訳本(前述のように毛沢東は1939年の後半にはこれを読んでいた)。民族運動は第一次世界大戦とロシア革命後、世界プロレタリア社会主義革命の一部となっているとのスターリン理論をこれを中国に適用できれば、プロレタリア階級(中共)の指導は当然だ、との結論が導かれる。ちょうど1939年に「五四」記念が大々的に行われ、「第一次世界大戦とロシア革命」以後という条件を満たす五四運動が、中国民族解放運動や中国マルクス主義の起点としての評価を受けるようになっていたことは、このスターリン理論の適用を可能にした。毛沢東は中共系理論家たちの五四記念言説をもとに、「五四運動時期」に「初歩的な共産主義思想を有する知識分子がたくさんいた」のであるから、「五四運動は当時のプロレタリア世界革命の一部であった」と論じることができたのである。毛沢東が新たな革命論の構築に際し「新民主主義」を称したことは、毛沢東(もしくは彼のブレン)の独創であったにせよ、その議論は、スターリン理論に倣うことで、マルクス主義の革命理論としての正当性を確保しようとしたものだった。

だが第三に、「新民主主義論」が、国民党に対して(あるいは中間勢力を含め)説得力を有していたかどうかは、全く別問題である。蔣介石にせよ張君勳や葉青といった論者にせよ、彼らはそもそも、マルクス主義理論の「正しさ」に関心を持っていないからである。蔣や反共理論家たちに対抗するためには、彼らの圧倒的な上位に位置する孫文の「三民主義」を、共産党にとって(敢えて言えば)都合の良い理論として解釈し直し、そのことによって自らを孫文思想の継承者としての「正統」を標榜せねばならない。だからこそ、毛沢東は、「新民主主義論」にあって、五四記念言説の中で生まれていた連ソ・連共・農工扶助の「三大政策」を「発展をとげた三民主義」とする中共理論家(艾思奇)の規定を一步すすめて、これを孫文の「新三民主義」なのだ、と主張した。また「新民主主義の経済」を論じる際には、その根拠として国民党第1回全国大会の決議と、孫文の「資本節制」「平

均地権」の主張を引用している。こうした「新三民主義」の提起、国民党大会決議や孫文の言説の利用は、毛沢東が孫文革命の「正統」が自らの手にあることを主張するためであったと考えられる。その後、「新三民主義」は、政治過程でも歴史記述でも大きな影響力を持った。しかしそれは、歴史学の検証にたえる実存在としての理念というよりは、蒋介石に勝利するために毛沢東が打ち出した、理論面での「武器」であった。

第四に、毛沢東はこの「新民主主義論」で国民党の政治論に対し、本格的な批判を加えている。陳伯達は前述のように、「新民主主義論」は「ブルジョワ独裁を樹立しようとする反動的夢想」と「党内の日和見主義」に痛撃を与えた、としているが——同様に「新民主主義論」は、蒋介石と王明を批判するものだったとする見解もたしかに中国の研究者の間にはあるのだが——「新民主主義論」が明確に示したのは、「ブルジョワ独裁」「左」傾空談主義「頑固派」などの語を用いての国民党の政治論に対する批判であり、だからこそ毛は、抗戦の勝利の果てに（「三民主義共和国」ではなく）、事実上ソヴィエトを「政体」とする「新民主主義共和国」を提起し、革命的諸階級の「連合独裁」の概念を提起したのだった。それはたしかに、抗日戦争から国共内戦の時代にかけて、中国共産党に大きな指針を示した。そのことは、1940年の五四記念言説の増大にも示されている。『新華日報』や『新中華報』では「五四記念」のグレードが上がり、中共系の雑誌にも社説や論文などが数多く掲載されている⁽⁸⁰⁾。

ところが、興味深いのは、中共とその周囲の1940年「五四」記念言説が、毛沢東の見解一色に染まった、とも言いがたいことである。たとえば、潘梓年が1940年の五四記念で発表した論文は、実は1938年論文の基調を維持して「新文化運動」の「狭隘性」と「限界性」を縷々指摘しており、論文の冒頭では、次のように主張する。——「〔五四運動〕当時の主要な動力はブルジョワ階級とプチブルの知識分子であった。運動の指導権は、一般的に言って、ブルジョワ民主主義の知識分子の手にあった」。しかも彼が、この論文で主張している新民主主義の開始時点は、なんと抗日戦争開始後のことである⁽⁸¹⁾。

こうした毛沢東とは異なる見解の表明は、潘梓年だけにとどまらない。1940年の五四記念にあって、艾思奇が『中国文化』に発表した「五四文化運動の特徴」⁽⁸²⁾は、「新旧の民主主義革命の「交替の過程」を、1915年の『新青年』創刊に始まり1923年の科学と人生観論争で終わるとしている。毛沢東とは異なり、8年間にわたる新文化運動を旧民主主義時代から新民主主義時代への「交替期」とするのである。毛沢東流に文化運動の時代的画期を1919年と見ることに無理があった以上、この艾思奇の議論は、画期を抗日戦争開始後にまで遅らせる潘梓年の議論とともに、毛の議論の矛盾を打開する策の一つであったように考えられる。

このほか、同じく40年5月公表の党員歴史学者呂振羽の論文「五四運動の歴史的意義と教訓」⁽⁸³⁾が、五四運動の「主要内容は反日反売国政府である」とし、「民族資本者〔＝ブルジョワ〕集団」がこれを指導したとして、毛とは異なる五四運動論を述べている。同月、重慶の中共系雑誌『理論と現実』の社説「五四運動と民主主義」⁽⁸⁴⁾も、「五四運動は本質的には民主主義運動である」として1915-22年を「五四時代」と呼び、「五四時代にあつて思想と文化に表れた民主主義〔在五四時代表現於思想文化上の民主主義〕」に注目している。潘梓年も、艾思奇や呂振羽も、そして『理論と現実』社説執筆者も、もちろん、自分の見解が毛沢東「新民主主義論」への異論であるとは述べない。しかし、このように言説を辿れば、それが毛への異論であることは見紛いようもない。

知識人たちから「新民主主義論」への異論が提起される。——この状況は管見のかぎり、このあと10年間、すなわち1949年まで続いた。このように考えるのは、著名な文芸史家李何林の所論をめぐる論争からである。

李は、抗日戦争期に中国各地で版を重ねた『近二十年中国文芸思想論』（上海生活書店、1940年初版）の著者であった。彼はこの著書が取っていた立場である「1917年から1927年まではブルジョワ文芸思想の発展とプロレタリア文芸思想の萌芽の時代である」にもとづき、1948年秋、新たな著作を構想したのだが、このことを知った経済学者・銭俊瑞（李が勤める河北大学教務長）や中共史家の何幹之から激しい批判を浴びたのである。近代史研究者であった范文蘭も加わった李に対する批判の内容は、要するに、五四運動の「主要な指導思想はプロレタリア階級の共産主義思想だ〔主要領導思想は無産階級的共産主義思想〕」、だから「プロレタリア文芸思想」は1927年まで「萌芽」だったとするのは間違っている、という毛沢東の議論を絶対視する立場からのものだった。

ほんらい、李の観点は抗戦期にあつて中共系知識人の間でも支持を受けるものであったから、彼は抵抗したし、そのため書簡や面談を通じての議論は1年近く続いた。だが、1949年9月、李何林はまず学内で自己批判し、ついで翌年5月、『光明日報』で経緯を公表した。彼は自著の誤りを、プロレタリア文芸思想が中国文芸思想界の「主導勢力」となったのは1928年のことだと考えてしまい、「五四ですぐに指導思想となったことを指摘しなかった〔没有指出来從五四起就是領導思想了〕」ことにある、と認めた⁽⁸⁵⁾。この1950年5月、北京の中等以上の学校や新聞・雑誌はまさしく「誰が五四運動を指導したのか」をめぐる大規模な討議を繰り広げていた。その結論は、毛沢東の主張のとおり、「共産主義知識分子」と「プロレタリア階級の思想」が五四運動を指導したのだ、とするものだった⁽⁸⁶⁾。ならば、毛沢東の「新民主主義論」は、それが成立をめざした「新民主主義共和国」の成立後にあつてはじめて、中共支持の知識人や（中等学校以上の）学生たちの支持を——どのように考

えても一定の強制を伴ったそれを——獲得できた。端的に言えば、「新民主主義論」とは、それが産み出した「新民主主義国家」によってはじめて完全に正当化された。いわゆる「民主主義」一般の原理を否定する国家によってである⁽⁸⁷⁾。

註

- (1) 中国毛沢東思想理論与实践研究会理事会編『毛沢東思想辞典』中共党校出版社、1989年10月、巢峰・李君如主編『毛沢東思想大系』総論卷、上海人民出版社、1993年、7頁。このほか、毛沢東思想基本問題編写組『毛沢東思想基本問題』（中共中央党校出版社、1999年）の第1章が論じるのも、「新民主主義革命と新民主主義社会」である。
- (2) 『中国共産党歴史』上巻、人民出版社、1991年7月、20頁。中国革命が「ブルジョワ民主主義共和国の樹立を目的とするような旧式のブルジョワ民主主義」から変化を遂げたのは、「五四運動を転換点としている」と述べ(20頁)、人民共和国の成立を「新民主主義革命の勝利」と位置づけている(785頁)。
- (3) 竹内実編『毛沢東集』第2版、第7巻、1983年、124-125頁。
- (4) 『毛沢東集』第7巻、124-127頁。
- (5) 『毛沢東集』第7巻、127-129頁。
- (6) なお、「新民主主義論」は1940年3月、単行本として解放社から出版されている。
- (7) 『毛沢東集』第7巻、161-162頁。
- (8) 『毛沢東集』第7巻、125頁。
- (9) 『毛沢東集』第7巻、190頁。
- (10) 『毛沢東集』第7巻、177頁。
- (11) 『毛沢東集』第7巻、162-163頁。
- (12) 「新民主主義的文化」、『毛沢東集』第7巻、185頁。
- (13) 「中国文化革命的歴史特点」、『毛沢東集』第7巻、186-187頁。
- (14) 「四個時期」、『毛沢東集』第7巻、190頁。
- (15) 陳独秀「文学革命論」、『新青年』第2巻第6号、1917年6月。
- (16) 中央大学人文科学研究所編『「五・四」運動研究史シンポジウム記録』中央大学出版部、1988年7月。
- (17) 朱務善「五四革命運動イコール新民主主義革命だったのか?〔五四運動是否就是新民主主義革命〕」(『歴史研究』1962年第4期、1962年8月)は、李大釗率いる「マルクス学説研究会」が北京大学図書館で会合を開き、李は学生たちから報告を受け運動に向け指示を出していたのだ、とする一部で流行していた言説を完全に否定し、五四運動＝「新民主主義革命の開端」という毛沢東に由来する「公認の伝統的観点」(黄愛軍後掲論文)に異を唱えた。朱務善は、1919年に北京大学に入学して同学学生会主席・北京学生連合会主席に選ばれており、北京五四運動について見解を表明する資格を有した知識人であった。
- (18) 前述の朱務善の論点が学説史の中で継承者を見出すのは、20数年後の張静如・姜秀花「五四運動は新民主主義革命の開端ではない〔五四運動不是新民主主義革命的开端〕」(『東岳論叢』1989年第5期、1989年10月)を待たねばならなかった。張・姜は、五四運動時に毛沢東の言うような「初歩的な共産主義思想を有する知識分子」は「おおぜい〔大批〕」はいな

かった（李大釗と李達、せいぜいあと一人か二人である）、李大釗は直接五四運動を指導してはいない、思想的な指導も過度に評価してはならないとし、(1) 五四運動はプロレタリア階級が指導したものではない、(2) 五四運動は徹底的な反帝反封建運動ではない、(3) 五四運動が当時のプロレタリア世界革命の一部であったと言う〔毛沢東の〕議論も不十分である、と主張した。

この結果1990年代になると、新たな新民主主義革命の起点説が次々に提起され、(1) 1920年8月（最初の共産主義組織成立）、(2) 1920年11月（『中国共産党宣言』・『共産党』）、(2) 1921年（中共第1回大会）、(3) 1919-1922年（五・四運動から中共第2回大会）、(4) 1922年（労働運動高揚・中共第2回大会）、(5) 1924年1月（第一次国共合作成立）、(6) 1925年5月（五・三〇運動）、(7) 1927年7月（国共分裂）、(8) 1927年8月（南昌蜂起・中共八七緊急会議）、(9) 1927年9月（南京国民政府成立）を数えている（黄愛軍「新民主主義革命開端研究概述及思考」『党史研究与教学』2002年第2期、2002年4月、邢浩「十数年来新民主主義開端研究綜述」『北京党史』2007年第4期、2007年7月）。

- (19) たとえば、それはコミンテルンの「中国革命＝非資本主義的發展」論であるとか、革命の性質・動力・ヘゲモニーやその前途をめぐる陳独秀の国民革命期の議論であるといった主張が提起され、さらには、30年代の「中国社会主义論戦」や「中国現代化」論争、「中国農村派」の言論の影響が注目されてきた（東方朔「共産国際与新民主主義革命基本思想的形成」『齊魯学刊』1996年第3期、1996年5月、范彩屏「陳独秀与新民主主義革命理論」『安徽教育学院学報』2002年第2期、2002年4月、張勇「新民主主義理論与三四十年代關於中国現代化的論争」『中共党史研究』2000年第2期、2000年3月、郭若平「新民主主義理論的学理探源——对“中国社会性質問題論戦”有益成果的吸取」『中共党史研究』2003年第4期、2003年7月、張太原「近十年来抗戰時期新民主主義理論研究述評」『党史研究与教学』2006年第5期、2006年10月）。
- (20) 劉輝「近二十年来新民主主義革命理論研究述評」『教学与研究』2001年第12期、2001年12月。
- (21) 胡国生「五四紀念与五四精神——基於中国共産党五四紀念活動為中心」『探索』2009年第2期、同「論民主革命時期中国共産党对五四運動的紀念活動」『中共党史研究』2009年第5期、董德福「關於五四運動研究的三個問題——從国共兩党紀念五四運動談起」『江蘇大学学報』第11卷第3期、2009年5月、楊濤「民国時期的「五四」紀念活動」香港中文大学『二十一世紀』2010年6月号、張艷「“青年節”抑或“文芸節”：20世紀三四十年代的五四紀念節探析」『史学月刊』2015年第8期、2015年7月。
- (22) なお後年の1942年4月、国民党中央は、5月4日は法定紀念日ではなく、「青年節」でもないとして、記念行事の実施を禁じた（「青年節日期正在会商中 五四不举行紀念」『中央日報』1942年4月29日）。44年3月、青年節は3月29日の革命先烈記念に併催することが許可されたが、政府からの正式公布は不要とした（「第250次會議」1944年3月6日、中央委員会秘書処編印『中国国民党第五届中央執行委員会常務委員会會議記錄彙編』1169頁（小野寺史郎氏の指教による。記して感謝する））。
- (23) 黄琪翔「發揚『五四』精神鞏固青年團結」『新華日報』1938年5月4日。
- (24) 潘梓年「繼承『五四』光荣傳統」『新華日報』1938年5月4日。
- (25) 「那時所提倡的賽茵斯、只是囫圇吞棗地介紹一些人家科学研究成果、而並未注意到怎樣才能使外来的科学種子播種在中国自己国土里而描芽茁葉、而開花結果」。

- (26) 「必須加以高揚同時又必須加以批判的、是那時反对孔教、反对旧倫理那一個狂潮。……當時的打到孔家店、太嫌籠統了、把我国数千年來固有文化一筆抹殺了、把孔教中某一些好的東西、值得吸取過來的東西都「玉石俱焚」了、未免太不科学。
- (27) 艾思奇「完成五四文化運動的任務」『新中華報』1938年5月10日。
- (28) 「五四文化運動並沒有完成、民主的科學的精神、並沒有在中國民族里普遍地發揚起來、只能為殘缺不全的文化傳統、留到今天。這是因為什麼呢？第一是由於封建的頑強的存在……、第二是由於五四還是民族文化的否定的時代、不能民族本身的基礎上發揚起民主的科學的精神、新文化基礎是不堅固的」。
- (29) ただし、「20年來の中國民族解放運動」の「偉大なる開端」（新華社説）とはあるが、時代の画期的ようには述べられていない。
- (30) 陳伯達「論五四新文化運動」『認識月刊』創刊号、1937年6月。
- (31) 陳独秀に対し「民族の裏切り者〔漢奸〕」「日本のスパイ」といった全くのデマによる攻撃がなされていたことについては、江田憲治・長堀祐造編訳『陳独秀文集』第3卷、平凡社東洋文庫、2017年、268頁。
- (32) このほか、1938年の『新中華報』5月20日に、「為紀念「五四」十九周年致全國青年」という西北青年救國連合會戰時短期青年訓練班の声明が掲載されているが（第4面）、扱いは大きくない。なお、延安の中國共產黨中央機關誌『解放』週刊の1938年36期（5月1日）、37期（5月6日）、38期（5月15日）には「五四記念」關係の文章は掲載されていない。漢口で刊行されていた『群衆』週刊でも、第21期（1938年5月7日）の許滌新「五月的血賬」が、「五一」「五三」「五五」「五七」「五九」「五卅」とともに、「五四」に短く言及しているだけである。
- (33) 「在文學方面、它提出『文學革命』的口號、為今日中國的新文學運動開了一條發展之路。……所以『五四』運動、除在我國民族解放鬪爭的歷史上具有偉大的意義、還又是整個中國新文化運動和思想啓蒙運動史上的一個大的轉變點」。
- (34) 艾思奇「五四文化運動在今日的意義」『新中華報』1939年4月28日。
- (35) 「五四文化運動是中國民族精神空前覺醒的運動、這一個運動、是中國民族民主革命鬪爭的歷史產物、它所以空前的、是因為在它以前、中國革命運動中沒有產生這樣一種大膽的思想運動、能够企圖徹底洗刷自己民族中陳腐的遺物、並努力出嶄新的精神來動員自己民族的革命力量」。
- (36) 「第一、五四文化運動無情地反对了中國民族文化中一切陳腐的東西、但並不是絕對否定了中國文化。……第二、五四文化運動曾介紹了各種各樣西洋的學術思想、但並不能說這新文化的內容僅只在於外來文化的輸入。……五四文化運動中各種學術思想的介紹、其意義就是為中國自己新文化的植物探求適宜的肥料」。
- (37) 「五四文化運動所培養出來的最大的兩株文化樹、就是中國的馬克思主義和發展了的三民主義。……從五四文化運動起、中國開始產生了真正自覺地民衆運動、特別是無產階級也在這一個運動里登了台。這使中山先生的三民主義有了進一步的發展的基礎。中山先生很快地就認識到了這樣一個基礎、於是在三民主義里加入了三大政策」。
- (38) 「中國共產黨與中國國民黨關係議決案」、中央檔案館編『中共中央文件選集』第1冊、中共中央黨校出版社、1989年、491頁、「今日巡行時高呼的口號」中華全國總工會省港罷工委員會『工人之路』1926年1月1日（總189期）。
- (39) 黃埔軍校同學會機關誌『黃埔潮』第11期（1926年10月3日）に掲載された余洒度「黃埔

- 同学会目前重要工作」には、「総理の革命的三大政策を遵守する。A. 連ソ、B. 連共、C. 農民・労働者の利益擁護」とある。
- (40) 『中共中央文件選集』第2冊、426頁、同第11冊、85頁。
- (41) 「二十年前的五四運動、表現中国反帝反封建資産階級民主革命已經發展到了一個新階段。五四運動之成為文化革新運動、不过是中国反帝反封建の資産階級民主革命之一種表現形式。由於那個時期新的社会力量的生長与發展、使中国反帝反封建の資産階級民主革命獲得了一支生力軍、這就是中国的工人階級、学生群衆与新興民族資産階級、而在五四時候、英勇出現於運動先頭的則是数十万的学生、這是五四運動比之辛亥革命進了一步的地方」。
- (42) 「若問一個共產主義者問甚麼要首先為了實現資産階級民主主義制度而鬭爭、然後再去實現社会主义の社会制度、那答復是：走歷史必由之路」。
- (43) 「知識分子如果不与工農民衆相結合、則將一事無成、辛亥革命与五四運動的失敗、就是這個原因」。
- (44) 「五四運動正是做了反对壳国政府的工作、所以它是革命的運動。…五四運動干甚麼的？也是反帝反封建の民主革命、但也是失敗了。中国仍然在帝国主義与封建勢力統治之下」。毛沢東「在延安五四運動二十周年紀念大会の演講」、『中国青年』第1卷第3期、1939年6月。
- (45) 「中国反帝反封建的人民隊伍中、有着由中国智識青年学生青年們組成的一支軍隊、這支軍隊是相當的大、……這支幾百万人的軍隊、是反帝反封建的一個方面軍、但是光靠這個方面軍是不够的、……因為他不是主力。主力是誰呢？就是工農大衆。……所以全国智識青年学生青年一定要同广大的工農群衆結合在一塊、同他們變成一体、才能成功一支強有力的軍隊、這是一支幾万万人的軍隊呵！」、同前。
- (46) 『毛沢東集』第7卷、146頁。
- (47) 『中国革命和中国共產党』、『毛沢東集』第7卷、125頁。「新民主主義論」、同149、155-156頁。
- (48) 「中国革命的歷史特点分為民主主義与社会主義兩個步驟、而其第一步現在已不是一般的民主主義、而是中国式的、特殊的、新式的民主主義、而是新民主主義」、『毛沢東集』第7卷、147頁。
- (49) 『毛沢東集』第7卷、148頁。
- (50) 「在這以後、中国資産階級民主主義革命、却改變為屬於新的資産階級民主革命的範疇、而在革命的陣線上說來、則屬於世界無産階級社会主义革命的一部分了」、『毛沢東集』第7卷、149頁。
- (51) 『スターリン全集』第4卷、大月書店、1952年、191頁。「它在社会主义の西欧和被奴役的東方之間、架起了一條橋梁、從西方的無産階級起、經過俄国革命、到東方的被压迫民族止、建築了一條新的反对世界帝国主義的革命戰線」、『毛沢東集』第7卷、152頁。
- (52) 『スターリン全集』第7卷、大月書店、1952年、231頁、「欧戰和十月革命已把民族問題從資産階級民主主義的一部分、變為無産階級社会主义革命的一部分」、『毛沢東集』第7卷、153頁。
- (53) 『毛沢東集』第7卷、125頁。
- (54) 『毛沢東集』第7卷、190頁。
- (55) 中国人民大学図書館編『解放区根拠地図書目録』中国人民大学出版社、1989年11月、42頁。
- (56) 楊奎松「毛沢東為甚麼放棄新民主主義——關於俄国模式的影響問題」『近代史研究』1997

- 年第4期、1997年7月。
- (57) 王也揚「歷史地看待毛沢東的新民主主義論及其變化」『中共党史研究』2001年第3期。
- (58) 于光遠『“新民主主義社会論”の歴史命運——讀史筆記』長江文芸出版社、2005年12月。
- (59) なお、このレーニンの論文は、『レーニン全集』（大月書店版）に収録されていない。
- (60) 于光遠前掲書、29-31頁。
- (61) 「毛沢東同志有機會寬泛地閱讀斯大林的著作、是在抗日戰爭的時候。毛沢東同志用最高的熱情、來閱讀和深思熟慮他所得到的斯大林的各種著作。大家知道：毛沢東同志在他所寫的「新民主主義論」裏面、就說明了斯大林的著作所給他的重要的啓發。毛沢東同志說明了中國共產黨人提出關於中國革命是世界社會主義革命的一部分這一個正確的命題是根拠斯大林的理論的。毛沢東同志根拠斯大林的理論發揮了無產階級領導權的思想、而在他這部著名的戰鬪著作裏面、一方面迎頭痛擊了關於在中國建立資產階級專政的反動夢想、另一方面則迎頭痛擊了企圖使無產階級追隨資產階級的黨內機會主義」（陳伯達『斯大林和中國革命』人民出版社、1957年7月上海重印一版、16頁）。
- (62) 高華「在“道”与“勢”之間——毛沢東如何籌画延安整風運動」『中国社会科学季刊』第5期、1993年11月。
- (63) 『中共中央文件選集』第11冊、586頁。
- (64) 同前、591頁。
- (65) 同前、622頁。
- (66) 同前、633頁。
- (67) 同前、626頁。
- (68) 同前、627頁。
- (69) 同前、629頁。
- (70) 「對於我們、愛國主義与國際主義密切結合着、我們口号是為保衛祖國反对侵略者而戰。對於我們、失敗主義是罪惡、全力援助蔣委員長与國民政府是天職、是責無旁貸、在這里、不能有一点消極性」、同前、641-642頁。
- (71) 張君勱「致毛沢東先生的一封信」『勝利』1939年第11期、1939年1月21日。同文が『中央日報』12月25日に初掲であることは、『血路』第44期（1938年12月）の編者注による。
- (72) 張絢中「評毛沢東先生先生「論新階段」」『血路』第48期、1939年1月28日。
- (73) 陳伯達「論孫先生及其學說（続完）——『三民主義概論』增訂版序論——」『解放』第116期、1940年10月1日、葉青「一次革命与民生主義」『血路』第56期、1939年4月1日。
- (74) 『中共中央文件選集』第12冊、中央「關於拒絕所謂一個大黨問題給周恩来的指示」（1939年1月22日）、6頁。
- (75) 周恩来「關於平江慘案致陳誠的抗議電」（1939年7月2日）、中共中央文献研究室・中央檔案館編『建黨以來重要文献選編』第15冊、中央文献出版社、2011年、422頁。
- (76) 「毛沢東先生与中央社記者劉先生、掃蕩報記者耿先生、新民報記者張先生的談話（九月十六日下午六時在延安）」『解放』第86期、1939年10月10日。毛沢東はここで、「礼は往來を尚ぶ。往きて來たらざるは礼に非ざるなり。來たりて往かざるもまた礼に非ざるなり」と、『礼記』を引用して「自衛」の正当性を語っている。
- (77) 「中央対時局指示」1939年12月23日、『中共中央文件選集』第12冊、221-222頁。
- (78) 前掲『毛沢東思想基本問題』9-10頁。
- (79) 王檉林主編『中国新民主主義理論研究』党建讀物出版社、1998年。

- (80) たとえば、延安の『新中華報』は、この年はじめて「五四」の記念社説（「紀念五四廿週年」5月7日）を掲げ、重慶の『新華日報』でも、「五四」関連の文章・記事は、前年より数が増えている。また雑誌『中蘇文化』第6巻第3期（5月5日）には、12編もの「五四」関連の論文や回想が掲載されている。
- (81) 彼は次のように述べている。「到現在、抗日戦争這民族解放運動、已不能不採取完全新的形態而要求完全新的東西了。……這新的東西就是新民主主義」。梓年「繼承五四的革命傳統開展新民主主義的文化」『新華日報』1940年5月4日。
- (82) 艾思奇「五四文化運動的的特点」『中国文化』1940年第1巻第3期、1940年5月25日。
- (83) 呂振羽「五四運動的歷史意義和教訓」『中蘇文化』第6巻第3期、1940年5月5日。
- (84) 本社「五四運動与民主主義」『理論与現實』第2巻第1期、1940年5月15日。
- (85) 李何林「五四以来中国新文学的性質和領導思想問題——『近二十年中国文藝思潮論』自評」『新華月報』第2巻第3期、1950年7月、原載『光明日報』1950年5月4日。
- (86) 李何林「五四時代新文学所受無産階級思想的影響」『新建設』第4巻第2期、1951年5月1日。
- (87) なお、鄧小平のブレンであった経済学者于光遠が、1988年、新民主主義の理論は「新民主主義革命論」と「新民主主義社会論」の両者を包含するべきである、と問題提起して以来、「新民主主義社会論」は多くの研究者の関心を集め、存否を含めて論争も起こっている。「新民主主義社会論」を支持する研究者は、「新民主主義社会」の意義を強調し、これが後年の「社会主義初級段階論」と接続する側面に注目しているが、そこではやはり、新民主主義理論に対する特定の評価が前提となっている。胡繩「毛沢東的新民主主義論再評価」『中共党史研究』1999年第3期、1999年5月、章德峰・彭建莆「不能泛化『新民主主義論』中的某些具体論断——与胡繩同志商榷」『中共党史研究』2000年第3期、2000年5月、盧潔「毛沢東新民主主義理論与中国現代化——兼評毛沢東思想是關於革命的理論而不是建設的理論的觀點」『党的文献』2007年第1期、2007年1月、張浩「当代中国新民主主義社会論研究之若干重大領域」『蘭州学刊』2010年第1期、2010年1月、陳龍「新民主主義社会論研究述評」『湖湘論壇』2012年第3期、2012年5月、任曉偉「新民主主義社会理論是馬克思主義中国化的創新成果——關於新民主主義社会理論“不能成立說”的學術反思」『陝西師範大学学報（哲学社会科学版）』第41巻第6期、2012年11月、など。